

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

Friday 10 June 2011 09.00 – 12.00

J.12 JAPANESE TEXTS, 1

*Answer **ALL** questions. All questions carry equal marks*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of each Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS

20 Page Answer Book x 1

Rough Work Pad

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator

1 Translate into English:

二つの戦争観 一九三七年七月、日中全面戦争が始まると、それまで人々の意識の底にかくされていていた「外に帝国主義」を要求する声が急に頭をもたげてきた。大戦争が始まつたからにはともかく勝たねばならない、とする既成事実にひきずられる考え方や、戦争は勝利しつつあるという実感や、三七年までに早くも七七万人の軍人が出征したという事実がもつ重さなどが、言論統制や世論誘導とともに、民衆の意識の変化に圧倒的な影響力をもち始めた。

一九三七年末に企画院産業部が中央農林協議会などの協力をえて行つた全国三八町村の実態調査によれば（以下、内閣情報部編『事変下に於ける農山漁村の思想動向』による）、对中国戦争についての農山漁村の民衆の態度は、一村規模で大きっぽいえば、「中流以上は（再び「紛争」がおこらぬようになるまで）徹底的に……やって欲しい。中流以下は早く止めて欲しい」（宮城県南方村）というものであつたという。

地域社会で「中流以上」とみられる民衆は、生活に余裕があるために、公的な戦争目的である

question continues...

「聖戦」イデオロギーを正面からうけとめて原則的、積極的であった。これに対し「中流以下」の民衆は戦争継続によつて大きな打撃をうけやすく、きれいごとにすぎない「聖戦」イデオロギーも浸透しにくかつたから、早期終戦を強く願うことになつたということであろう。

もちろん、「中流以下」の民衆の中に戦争に積極的な者がいない訳ではなく、また各町村ごとに戦争に対する態度はかなり異なつていた。

一方の極には、戦争に消極的なつぎのような村があった。静岡県静浦村では「一日も早く事変の終了することを内心に於ては希望するもの絶対多数と見ら」れていた。同県相川村でも「仕方がない」という気分で、早く終戦となることを願つてゐるようみうけられた。岩手県重茂村でも「早くおさまればよいと考える」のが一般的であつた。

他方の極には、「徹底的に遂行して再びかゝる事態を繰返すことなく善処せられんことを希望している」(兵庫県三方村)という声に代表される奈良県黒滝村、兵庫県若狭野村、広島県西志和村、山口県神玉村、長崎県脇岬村など過半数の村があつた。

右の二つを両端とする入り組んだ態度が民衆の実態に近いものであろう。

草の根帝国主義 しかし、「中流以下」の民衆を中心とする早期終戦を願う内なる声の内実をさぐつてみると、かなりの比重をもつて、つぎのような姿が浮かび上がつてくる。

2 Translate into English:

一九四九年（昭和二十四年）暮れから一九六九年（昭和四十四年）初頭まで、総勢八三名にものぼる日本軍将校が台湾に渡り、蒋介石率いる中国国民政府軍を陰で支援してきた歴史がある。だが、彼らは全員中国名をなのり、その活動は極秘とされてきたため、その全容についてあまり多くの人々には知られていない。

後年になつてからはともかく、その活動期間当初の日本はGHQ（連合国最高司令官総司令部）の占領下である。サンフランシスコ条約締結（昭和二十六年九月八日）までにはいま少し歳月を必要とし、職業軍人たちはもちろん公職追放処分の身であつた。彼らには海外渡航の自由などあるはずもなく、目的そのものが軍事活動への参加ということになれば、世界中から糾弾されてもしかたのない違法行為だつたのである。

しかし、無謀ともいえる台湾への密航計画が決行され、約二〇年もの長期にわたり国民政府軍に対する軍事顧問活動が秘密裏で行われてきた。

台湾へのこの密航を長期にわたり手助けしたのは、その頃ちょうど神戸に入港するようになつた「鉄橋輪」という中国国営招商局船籍のバナナ船（二千数百トン）であつた。船に潜りこ

question continues...

むために、彼らは中国人船員の上陸許可証を借りていた。情報化による管理と検査が高度に発達した今日ではなかなか信じられないことだが、この方法を幾度も繰り返していたにもかかわらず、日本の関係機関ばかりか、彼らが最も危惧したGHQや共産党にもついに見破られることはなかつたという。

また、歴史的に前例がないほど長期の軍事活動にもかかわらず、この件が社会的に一度も取り沙汰されたことはなかつた。団員たちは全員が中国名（偽名）を持ち、下船してからも表向きは中国人として振舞い、ある時期には地下潜行しながら任務にあたつたこともある。しかし、その一方で大きな時代背景があつたことも確かである。

ひとつには、この顧問団を招聘した往時の蒋介石には絶大な権力があり、彼らは終始その大きな庇護のもとで活動できたこと。もうひとつは、一九五〇年（昭和二十五年）六月二十五日に始まつた朝鮮戦争の顛末によつてアメリカ対ソ連・中共の対立がより激化し、その後一九八九年まで氷解することのなかつた米ソ冷戦の歴史が少なからず関連していたはずである。つまり、アメリカにとって台湾島とは、単なるアジアの孤島ではなく、日本、韓国と連なる資本主義陣営の対ソ包围網の一翼を担う重要戦略拠点だったのである。

実際、朝鮮戦争の翌年にアメリカの正式な軍事顧問団が台湾に派遣された時も、日本軍将校の存在が発覚したものの、社会的な大問題までには至らなかつた。また、これと前後して行われた密航団の日本側責任者に対するGHQの追及も、事実確認に主眼があつたようで、本件については以後不問に付された形で終わつてゐる。アメリカとしては、それ自体は不法とはいえ、

question continues...

(TURN OVER)

日本の軍事顧問団が自分たちの極東政策に相反する存在ではないと判断したことを物語つている。

それにしても、なぜこの軍人たちは当時の社会的状況や自らの置かれた立場を顧みず、また国民政府軍の再訓練が任務とはいえ、前途が知れない内戦の渦中へ飛び込んでいったのだろうか。

当時、公職追放とともに軍人恩給も停止されていたことを考えれば、個別的にはその報酬のために動いた者がいただらうことも否定できないが、当時の情況を考えれば、またそのことを誹謗できる者もないはずだ。ここで取りあげなければいけないのは、彼ら全員が心をひとつにしていた共通項が何だったのかということである。組織的なバックボーンが欠落していたのでは、個人的熱情などひとたまりもなくつぶされ、冷めてしまうような時代だったのだから。その共通項とは、蒋介石が敗戦国である日本にとつた「怨みに報いるに徳を以てする」という立場と、戦争責任賠償権の放棄をはじめとした「対日寛大政策」の恩義に報いたいという一心だったという。なぜなら、彼らはその活動期間を通じて、一般的な軍事顧問団がやるような兵器の販売などには一切無関係であつたし、容易に政治的経済的な思惑を差しはさむことができない（覆面のボランティア）であつた。

蒋介石 Chiang Kai Shek

糾弾 blame, reproach

国民政府 KMT (GMD)

顛末 circumstances, facts

軍人恩給 Veterans' benefits

賠償 reparations

NAKAMURA YUETSU, *Paidan*, Tokyo, 2006, pp. 1-3.

3 Translate into English (only the main text):

映画と写真

映画のエクリチュール



ドーミエのナダールを描いた絵

再現したいという欲求が起ころうるのは当然ですね。

その時に、写真から映画へという道が生じるわけです。しかし、もういちど、写真の発明を考えてみると、それに先立つてもともとカメラ・オブスキュラがあった。それは

暗室というより部屋で、その片方に小さな穴があって、そこから入ってきた光が反対側の壁に外側のイメージを逆さまの像にして写すことが発見される。このカメラ・オブスキュラのイメージは、二次元の光の像ではあるのだけれど、外が動いているからその像も動いていたわけです。その時に、すでに人々は、動くそのイメージというものを見ていたことになります。だからそれを固定する写真ということになりますね。写真が生まれる前から、すでに、動くイメージを人々は見ていたということを、意外に写真の歴史は見落としています。が、映画発生はカメラ・オブスキュラの中にはありますね。写真が生まれる前から、すでに、動くイメージをあつたわけで、そう考えると映画と写真とは本来切っても切れない関係の中にある、映画の側から見ると、写真は、それに先行する技術的要素とだけ考えられるのも当然だと思います。映画と写真が近く見えるというのは、そのようなイメージの技術に沿って見ていくにすぎないのでないかと思います。

写真は、外側の世界を人間的なイメージに再現する技術であることにはちがいないです。が、再現する技術ということと、固定するイメージでは不充分で、動く世界をまるごと

ところが、映画と写真とは、もう一方では、近いようで非常に遠い世界で、その遠さというのも否定できない。た

question continues...

(TURN OVER)

とえば、普通写真と映画を対比して常識的に考えてみると、写真は外側にある世界の二次元的な記録で、その記録は、我々が見ている写真は、それに先立った時間の、何日か前か、あるいは何年か前かというような過去に撮られた記録だということから、ロラン・バルトが、「ここ」ということと「以前」ということの非論理的結合だと言い表しているわけですが、そういったたぐいの記録として写真是考えられます。

それに対して映画は、むしろ見る人が、その中へ自分を投影していくことができるような、一つの虚構として存在しているわけですから、それは、過去と現在との結合ではない。常に現在、今見る時に、それ自身が展開するといったような、あるいは、人びとが見るときにそれ自身が成立するといったようなものだと、考えるのが普通ですね。したがって、今では物語性は否定されているけれど、映画というのは統辞的で、物語性を持つ可能性もあつたし、むしろ最初からクリスチヤン・メッツのような言い方をすれば、ランガージュとして成立していたわけです。その点で、実際に写真と映画とは非常に遠いものです。

再現する

カメラ オブスキュラ
ロラン バルト
統辞(論)
クリスチヤン メッツ
ランガージュ

represent

camera obscura (ancestor of the modern camera)
Roland Barthes (literary critic)
syntax
Christian Metz (film theorist)
langage (language)

TAKI KŌJI, 'Eiga to shashin', in *Kokubungaku* (August 1983), pp. 38-9

END OF PAPER